

ペットと暮らすシニア世代のあなたを支援する情報誌

わんにゃお 通信

Wan! Nyao! Press



vol.3 2021.春

捨て犬・ 未来と歩む 15年 特集



昨年春の未来ちゃん(写真:浜田一男さん)

我が家には動物愛護センター出身の愛犬が二頭いる。どちらも10歳を超える高齢犬だが先住犬の未来はこの夏に16歳を迎える。

子犬だった未来が右目負傷、右後ろ足首下切断、左後ろ足もすべての指が切られた状態で捨てられていたのは2005年夏。動物愛護センターに収容されたが、負傷犬のため譲渡対象とはならず、殺処分が決定していた。

その後、運よく動物保護ボランティアさんに救い出された未来は九死に一生を得て私の家族となった。

未来を我が家に迎える時、私の中には多くの不安があった。後ろ脚が不自由ながらひょっこらひょっこらと歩けたものの、この先高齢になれば、他の犬よりも早く歩けなくなるのではないかと、寝たきりになり長くは生きられないのではないかと？

散歩で出会う多くの人に「かわいそう」と言われ、そんな思いも相重なって、当初は、不自由な後ろ脚で懸命に歩く未来の後姿を涙ながらに見ていた。

ところが未来との暮らしを重ねていくうちに、そんな不安は次々と払拭されていった。

未来は自分の障がいを実に肯定的に受け入れ、「ないもの」を求めるのではなく「あるもの」を駆使することで、自身の障がいと15年もの間、上手に付き合ってきた。

そんな未来の姿は、見る人の心までも変えたようだ。未来の後足は不自由なままなのに、体の障がいは何も

変わっていないのに、歳をとるごとに未来はもう誰の目にも「かわいそう」な犬とは映らなくなっていた。

今ではすっかりおばあちゃんとなった未来だが、日常生活に何も不自由はない。毎日のお散歩も自力で歩き、未来のペースでゆっくりと楽しんでいる。

飼い主の愛犬・愛猫に対する「愛情」は、思い出の数だけ増える。

子犬や子ねこは、見た目はとてつもなく愛くるしいが、長い年月を共にした老犬・老猫の「愛しさ」とは比べ物にはな

(いまにし・のりこ) 1965年生まれ。大阪府岸和田市生まれ。千葉県在住。2000年に出版した「国境をこえた子どもたち」(あかね書房)第48回産経児童出版文化賞推薦受賞で、児童文学作家として活動を開始。二冊目の著書「ドッグ・シェルター」(金の星社)で、第36回日本児童文学者協会新人賞を受賞。テレビドラマ化もされた。執筆の傍ら、愛犬・未来を連れて全国の小中学校、図書館、少年院、刑務所などで「命の授業」を展開。座右の銘:「No dog No life」◎児童文学者協会会員 ◎認定特定非営利活動法人 動物愛護社会化推進協会理事 ◎公益財団法人 日本動物愛護協会理事 主な著書に「犬たちをおくる日」(金の星社)をはじめ、我が家の未来を描き続けたノンフィクション、捨て犬未来シリーズ「命のバトンタッチ」「しあわせのバトンタッチ」「捨て犬・未来と子犬のマーチ」「捨て犬・未来、命のメッセージ」「捨て犬・未来と捨て猫・未来」「捨て犬・未来と動物のお医者さん」(以上 岩崎書店)、「捨て犬未来に教わった27の大切なこと」「捨て犬・未来 しあわせの足あと」「いつかきっと笑顔になれる～捨て犬・未来15歳」(以上 青春出版社)など多数。

らない。それは飼い主だけが感じる特別な感情だろう。

未来が目が見えなくなり、耳はすっかり遠くなった。昼間もうつら、うつらと寝ていることが多い。その寝顔を見て、未来と今までに作った数えきれないほどの思い出をひとつ、ひとつ頭に浮かべる。どれも私にとって大切な宝物だ。

そして、願う一。もっと、もっと長生きしてね。そうすればもっと、もっと私の宝が増えるから。やがて、遠くない将来、未来が天国に旅立つ日がくるだろう。しかし別れを不安がるより、年老いた未来との今を大切にしたい。思い出は永遠だ。

おばあちゃんになった未来は、毎日の散歩でこんな言葉を周りからかけてもらう。

「未来ちゃん、すごいねえ!がんばっているね!未来ちゃん、今は幸せになってよかったね!」何よりの誉め言葉だ。

「昔幸せだった」より「今、幸せ」の方がいい。「今、幸せ」より「明日幸せ」の方がもっといい。「誰かを幸せにすること」は「自分を幸せにすること」だ。

未来が歳をとった分、飼い主の私も歳をとった。ゆっくりと静かに過ごす未来との日常が、今の私の年齢にとって心地よく、ふさわしい。

お互いのことを誰よりも理解し、信頼している。まさしく「あうんの呼吸」、高齢犬と暮らす醍醐味である。

児童文学作家
今西乃子
さん



MIRAI

KIRARA

今西乃子さんと抱っこされている「未来」とお座りする「きらら」(写真:浜田一男さん)